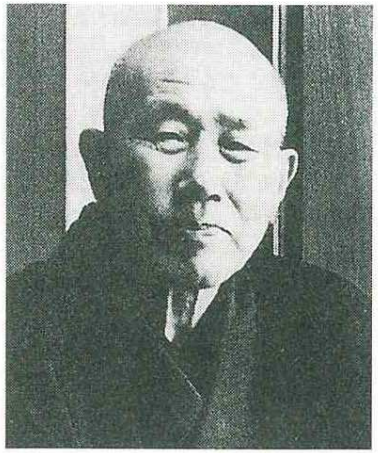
# 高山の文化を高めた人々 23

## 郷土史研究五十有余年 角竹喜登

角竹　弘



### 郷土史研究のはじまり

父・喜登が郷土史に興味を持ったのは子供の頃。中学一年のとき学友から借りた「飛騨史略」一冊を筆写したのが、学問への出発だったと聞く。

また中学の夏休みには、神岡鉱山の飯場で寝泊りして、鉱山の研究をまとめたり、坂下村の焼畑農業を研究するため、当地に二十日余り滞在し調査したというから、書物の上での学問だけでなく、今でいう民俗研究を明治時代の中頃に実践していたことになる。

しかし本格的に郷土史と四つに組んだのは、二十四歳で荘川尋常高等小学校長に奉職した時だった。

職務上郷土の姿を知りたいと荘川観察録を書き上げ、視学の先生に認められたからであろう。

### 本格的な郷土史研究

二十六歳で灘村の小学校長に奉職して灘村村誌、三十歳には丹生川村誌と著述が続いた。その後益田、郡上両郡の視学、武儀中、滋賀県八日市中、高山の斐太中と教職の旅を送るかたわら、郷土史探求は続き、郷土史研究誌「飛騨史壇」「ひだびと」等への投稿や県の仕事、またラジオ放送で十回にわたる郷土史の連続放送をした。

このあたりから角竹喜登の地位が築かれたと思う。

### 集めた資料は三万点

昔は古文書等は難なく手に入った。父の話によれば、校長といえども修身や習字を担当した。習字の時間ともなれば、練習用紙は古文書を持参する子が多かった。当時新聞をとっている家庭は少なかった。古文書と新聞紙と交換したらしい。個人の冠婚葬祭文書や借用証文、村方文書等であった。しかし古文書の大切さがわかり、入手が困難になると、月給の一部で購入するようになった。平田、田近書店ではよき客だったらしい。

昭和十年頃、私財を投じて集めた郷土史料を八軒町の自宅の倉庫に整理して「角竹飛騨郷土史料文庫」と名付けた看板が今でも目に写る。

### 高山市史執筆の裏ばなし

高山市史上・下を刊行したのが昭和二十七年、原稿書きは、昭和十四年から始まっていた。益田農林高校（現益田高校）での教鞭のかたわらの執筆は朝一番の汽車（五時三十分）に乗り、学校で弁当の朝食を食べ、冬は図書館を暖めて生徒を待つ生活のようであった。

五時頃帰宅すると、夕食を食べてすぐ寝る。起床は深夜十二時。これからが高山市史の執筆の時間であった。

### 高山市文化財「角竹郷土史料文庫」史料四万余点

昭和三十二に年高山市郷土館の初代館長に就任し、歴史研究者のよき指導者として活躍した。昭和三十六年には、長年にわたり苦心収集した史料を高山市郷土館に寄付した。同年、その史料は高山市文化財に指定された。

飛騨の古文書は、江戸時代研究の一級資料。東京の諸研究機関から高額な値段で誘いがあったが、資料は地元に置くのがベターと一さい話にのらなかった晩年の父だった。

昭和三十九年三月十九日岐阜市の自宅で没した。享年七十九歳であった。

墓は雲龍寺の墓地から移転し、岐阜城を望む長森の墓地で安らかに眠っている。